

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：32517

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23500890

研究課題名(和文) 乳児期から就学期の絵本を介した親子の相互作用に関する縦断的検討

研究課題名(英文) A longitudinal study of parent-child interaction via picture books in the period from infancy to school age

研究代表者

藪中 征代 (Yabunaka, Masayo)

聖徳大学・教職研究科・准教授

研究者番号：50369401

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円、(間接経費) 1,050,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、乳児期から就学期にかけての親子間の絵本を介した読み聞かせの中で、読書態度やコミュニケーションスタイルがどのように習得されるか、それらが親子間の情報交換とどのように関係しているかを探ることを目的としたその結果、絵本の内容が親子のやりとりに影響し、同一親子でもやりとりのスタイルは変化する、絵本の内容に左右されない親子は、お互いが相手の話題にどれだけ合わせられるかが重要である、ことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to examine how reading attitude and communication style are learned through parent-child pairs reading aloud with picture books from infancy to school age, and how those factors relate to information exchange between parent and child. As a result, it was found that: (1) Picture book content affects parent-child interaction, and interaction style varies even with the same parent-child pair, and (2) For parent-child pairs not affected by picture book content, the important issue is the degree to which both sides can adjust to the conversation topics of the other.

研究分野：乳幼児心理学

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：親子 絵本 読み聞かせ 相互作用

1. 研究開始当初の背景

(1) 就学期を研究対象とする意味

これまでの絵本の読み聞かせ場面のコミュニケーションを扱った心理学的な観察研究は、乳幼児と親を観察対象とした一部の研究に限られてきた(秋田, 1997; 嘉数, 2003; 神谷, 2003)。また、学童期の親子のコミュニケーション研究の多くは質問紙調査(秋田, 1997)に基づくものであり、子どもの就学期にかけての親子の読み聞かせ場面の会話に焦点をあてた言語的やりとりやその内容についての実証的研究は非常に少ない。

また、親や保育者に読んでもらうことの多い幼児期から、本を一人で読み理解することを求められる児童期への移行を経験する就学期における絵本の読み聞かせは、大変重要な意味をもっているといえる。なぜならば、親の中には絵本を文字が読めるようになるための道具として考え、文字が読めるようになると読み聞かせをやめてしまう場合が多く、このことが、読書離れの一つの要因として考えられている(藪中, 2008)。しかし、就学期に焦点をあて、親に読んでもらうことから自立読書へという読書行為の内化の過程を検討した実証的研究はほとんど見られない。

(2) 絵本の読み聞かせにおける相互作用をとらえる視点

乳児期から幼児期初期の絵本の読み聞かせにおける親子の社会的相互作用の実態について、平成17年から開始した研究により以下の点が明らかとなった(藪中・吉田, 2007; 2008; 2009)。

乳児期の絵本の読み聞かせは、「絵本について話す場」であり、多様な発話形態で親が子どもに話しかけている。

絵本を介して、子どもの反応を引き出す「親子間でやりとりを作り上げる場」となっている。

以上の結果から、乳児に対する親の読み聞かせは、親が子どもへことばによって働きかける割合の高い場であり、日常生活とはテーマを異にする親の言語情報が豊かになることが示唆された。

しかし、近年の乳児に関する研究(田島, 2003)から、母子間の情報のやりとりは、乳児の段階から子どもによる親の単なる受動的取り込み過程ではないといわれている。また、子ども一人では達成できない課題に対しては、重要な媒介的役割が親の役割であることが示されている。この考えに立てば、絵本を介した親子の相互作用の進展に伴い、「相互意図性」の次元へと高まっていくという視点からの分析が必要となってくる。そこで、上記の視点に立ち、幼児期後期から就学期にかけての絵本を介した親子の相互作用の発達的变化の追跡調査を追加する。

2. 研究の目的

本研究は、乳児期から就学期にかけての親子間の絵本を介した共同行為(絵本の読み聞

かせ)の中で、いかに子どもの読書態度およびコミュニケーションスタイルが習得されるか、それらが親子間で行われる情報交換とどう関係しているかを明らかにすることを目的としている。具体的な検討は以下の4点である。

(1) 親子での絵本の読み聞かせ場面を分析することにより、絵本を介した親子の相互作用の発達的变化、子どもの絵本への態度の発達的变化、絵本を介した親子のコミュニケーションスタイルと子どもの言語発達との関係を明らかにする。

(2) 家庭における絵本の読み聞かせ状況を分析することにより、この時期の親の役割、すなわち、物理的環境設定の役割、準備者としての役割、子どもが本を理解できるよう読書の熟達化を援助する役割、より良い読み方を行うような評価者の役割について明らかにする。

(3) 質問紙調査、聞き取り調査を行い、親の育児ストレスや絵本の読み聞かせに対する親の意識の側面について明らかにする。

(4) 就学後、広く学業に関する調査を行い、5年間にわたる絵本の読み聞かせに対する家庭の特別な関心が、子どもの生活や学力にどのような影響を与えるのか、そしてそれが、時期によってどのように変化していくのかを明らかにする。

3. 研究の方法

満5歳児をもつ家庭15組を対象に、絵本の読み聞かせ場面における親子の相互作用の発達的变化をみる。具体的な方法は、聖徳大学生涯学習社会貢献センター(以下、「センター」と記す)において、調査者の指定した絵本を親子が1対1で読み聞かせる場面をビデオ撮影すること、家庭での自由な絵本の読み聞かせを絵本ダイアリーに記入することである。これらから得られた結果を縦断的・横断的に検討する。併せて、家庭での絵本の読み聞かせ状況・環境、親がとらえている絵本の読み聞かせの意義、子育て環境、子育てに関するストレスなどについて調査を行う。先行研究(平成17~21年度社会連携研究:絵本を介した親子の相互作用に関する縦断的研究)開始時に0歳児であった協力家庭の子どもは、本研究期間中に学齢期に達する。「絵本と子育ての会」(後述)における経験が、就学後の子どもの学習態度にどのような影響を及ぼすのかについても検討する。「絵本と子育ての会」は、先行研究で始められたもので、月1回親子がセンターに集い、1時間半の間、自由遊びや集団遊び、集団での絵本の読み聞かせなどを行うものである。

4. 研究成果

(1) 絵本の読み聞かせ場面での親子のやりとり 横断的データによる検討

【方法】

協力家庭: 6歳児14名(男児7名, 女児7名)とその親(母親13名, 父親1名)合計

14組。

手続き：親子の絵本を介した読み聞かせ場面を観察し、VTRに収録。

絵本：『あいうえおの本』（安野三雅作，福音館書店，1976年）。この絵本は、見開きの左側には木でつくられたひらがな文字、右側にはそのことばの中心となる絵と周りの枠には、そのことばにちなんだ絵が描かれている。

【結果と考察】

分析カテゴリー：親子の絵本の読み聞かせの相互交渉場面についてのVTR記録から親子のやりとり（言語行動と非言語行動）を各親子のペアで文字化した。分析では表1に示す分析カテゴリーを使用した。

親子のやりとりをカテゴリーに分析し、それをもとに、表2の4つのタイプに分類した。やりとりの成立していない組（分類4）は、児からの発話がほとんどなく、親主導で児にモノの名前を言わせようと誘導し、親自身が絵本を読むことを楽しんでいないことが明らかとなった。分類2と分類3は、親子のどちらかは楽しもうとしているが、やりとりが噛み合っていない。親が楽しんでいる場合は、親主導で児に対する「コレ何？」の質問が多い。児が楽しもうとしている場合は、児の思いに親はほとんど応答せず、児への否定的な発話が多くみられる。

(2) 絵本の読み聞かせ場面での親子のやりとり 縦断的データによる検討

【方法】

協力家庭：横断的データと同一親子13組、5歳児13名(男児6名, 女児7名)とその親。5歳児『とこちゃんはどこ』（松岡享子著, 加古里子イラスト, 福音館書店, 1970年)のデータとの比較。

表1-1 分析に用いた言動のカテゴリ

子どもの言動カテゴリ		
カテゴリ	定義	
発話	言語的応答	ことばで答える
	思考過程	考えている道筋を話す
	質問	絵本の内容に関する質問（とこちゃんの居場所以外）
	呼びかけ	探すときのことば
	確認	「とこちゃん」の確認
	絵の言語化	絵を読み取ってことばにする（言語的応答と重ねている場合のみ）
行動	非言語的応答	ことばを使わず行動で答える
	探索行動	探すときの行動（発話を伴わない）
発話+行動	言語的応答+非言語的応答	言語的応答と非言語的応答が共起
	呼びかけ+探索行動	探索のための発話と動作が共起

【結果と考察】

5歳児の親子のやりとりを分類した結果を表3に示した。13組中12組の親子のやりとりが成立していた（分類1）。やりとり

が噛み合っていない1組（分類2）は、6歳児でも同様の結果であった。

やりとりのスタイルが変化しない親子ペア

分類1のやりとりが成立している親子は、絵本の内容に左右されず、相手の話題にどれだけ合わせられるかがポイントである。

分類2の親主導（親は楽しんでいるが、児はあまり楽しんでいない）の親子は、絵本の内容に左右されず、どちらの絵本においても親主導のスタイルをとっている。

やりとりのスタイルが変化した親子ペア(表4参照)

どちらも文字のない絵本を読書材としているが、児の年齢の差というよりも絵本の内容が親子のやりとりに影響を及ぼし、読み聞かせが変化することが明らかとなった。『とこちゃんはどこ』の絵本は、「とこちゃんを探す」という明確な目標があり、親子共にゲーム感覚で絵本を楽しむことができるために、やりとりが成立したと考えられる。

絵本の内容に関係なくやりとりが成立するためには、絵本を介したやりとりを通して、相手にどれだけ合わせられるかが重要であると考ええる。

表1-2 分析に用いた言動のカテゴリ

親の言動カテゴリ		
カテゴリ	定義	
発話	地の文	絵本中の文をそのまま読む
	賞賛・承認	こどもの言動に対して、ほめたり認めたりする
	加速・刺激	こどもが、よりいっそう「とこちゃん」を探るように促す
	相手への修正	こどもの言動を修正する
	自分への修正	自分の言動を修正する
	ヒント	こどもが「とこちゃん」を探すためのヒントを与える
	質問	「とこちゃん」の居場所以外の絵本の内容に関する質問
	情報の付加	絵から読み取れる（以上の）内容を話す
	確認	「とこちゃん」の確認
行動	賞賛・承認	こどもの言動に対して、ほめたり認めたりする
	ヒント	こどもが「とこちゃん」を探すためのヒントを与える
	探索行動	探すときの行動
	確認行動	確認するときの行動
発話+行動	加速・刺激+探索行動	探索のための発話と動作が共起
	確認+確認行動	確認のための発話と動作が共起

表2 親子のやりとりの分類

分類	内容	組
1	親子のやりとりが成立している。親子で絵本を媒介に楽しんでいる発話が多い。	6
2	親は絵本を楽しんでいる（感情語「へー」などが多い）。しかし、児は母とは別にあまり絵本には興味がない様子である。	3
3	児は絵本を楽しんでいるが、親が楽しんでいない（あまり興味がない）。	3
4	親子のやりとりがほとんど成立していない。	2

表3 親子のやりとりの分類 (5歳児, 『とこちゃんはどこ』)

分類	内容	例 (言葉は地の文)	組
1	親子のやりとりが成立している。親子で絵本を媒介にして楽しんでいる発話が多い。	親「とこちゃんはどこかかけて……さあどこでしょう」 子「とこちゃ～ん」 「とこちゃん」 親「あ、あんなところにいる」 子「えっ! どこどこ」 親「どこどこ。赤い帽子をかぶって」 子「これ!」指さす 親「あ、いたね」ページをめくる 「そうです。とこちゃんは……」 子「お母さん、ちょっと待って、とこちゃんこれでしょ」前ページに戻って指さしながら確認する 親「うん、すいかりみてたの。」	12
2	親は絵本を楽しんでいる (感情語「へー」が多い)。しかし児は母とは別にあまり興味がない様子である	親「夏になって……とこちゃんはどこどこ……」 「は～ (息を呑むような声)」「どこかへ……さあどこでしょう」 「どこかなあ～」 子: 絵本を見渡す 親「どこでしょう～」 「あっあんなところにいる」 親「いた～?」 子: 頷く 親「赤い帽子だよ」「浮き輪もってる」「赤い帽子で浮き輪もってる」「とこちゃんどこかなあ」「どこかなあ～」「どこかなあ～」 子: 少し身体を引き、肩をすくめる	1

表4 5歳時と6歳時との比較

組	5歳時 (『とこちゃんはどこ』)		6歳時 (『あいうえおの本』)	
	分類	特徴	分類	特徴
OM	1	基本的に親子とも、ほとんど目を離さない。特に児は、真剣にみている。母は「加速」が特に多い。児は、発話は少なく、行動が多い。	2	母主導。母の「これ何?」に児が答えるパターンが多い。母はよく「OK」と口にしていて、チェックしている (O付けの感覚) 印象。
SK	1	母は、児と一緒に「とこちゃん」を探す。児の発話は少ない。	3	児は、次々と名前を言う (よく知っている)。母は、どちらかという後半に回る印象。
OS	1	母は、基本的にマイペースで進める。児はずっと絵本から目を離さず、ニコニコしていることが多い。母・児とも、発話は少なめで行動が多い。	4	児はつまらなさそう。母は、児に名前を言わせようとしているようだが、うまくいっていない。母が顔絵に気づき、児を誘導する。児も顔絵を見るが、発話はなし。児の「もういい」「いいや」ということが象徴的。
KT	1	母は「賞賛」が多い。児は行動は0で発話が多い。特に「賞賛」が多い。	4	児は、あまり楽しめていない様子。1頁に1つ名前を言えたら次に進む感じ。早く終わりたいのか。「それよりもう終わりにする?」という発言あり。母は、児の興味を引こうとするが、あまりうまくいっていない。
TM	1	母は、発話、行動とも少ない。児も同様。	4	やりとりがかみ合っていない。児は楽しもうとしているが、母はあまり興味がない (「そろそろやめていい?」「すこく長い」「一通りみるのね」など)。母は児に対して否定的な発言多い (「ふんぞり返っている」「わからないよね」「知らないくせに」「知るわけがない」など)。また、母は自分のペースで進めたがり、児が「先に言わないで」と何度も言うが、真の後ろの答えをみることを繰り返している。児が「答えをみるのは後にして」と何度言っても、母の答えをみる行動は続く。

(3) 絵本ダイアリーからみた親子のやりとり 絵本ダイアリーの分析を通して

絵本に関する家庭での様子が母親によって記録されたダイアリーから、子どもが小学校入学を機にどのような変化が見られるかを分析した。

【方法】

協力家庭: 5歳児をもつ家庭4組 (男児2名, 女児2名)

手続き: 2011年8月 (幼稚園年長) と 2012年8月 (小学校1年) の家庭での絵本の読み聞かせの様子を記録した28日分の記録。

ダイアリーの内容: 読み聞かせの有無、読み聞かせた絵本名、読み聞かせの時間帯、読み聞かせた人・選んだ人、子どもの様子、読み聞かせたときの子どもの反応・母の感想等の自由記述。

【結果と考察】

読み聞かせの有無: 4組とも小学校入学後に読み聞かせの回数・冊数ともに減少している (図1, 図3)。

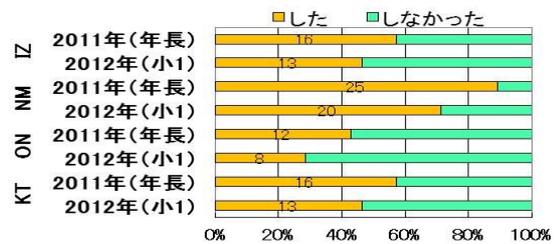


図1 絵本の読み聞かせをしたか

読み聞かせの時間帯: 幼稚園年長時期には、読み聞かせが就寝前の習慣になっている。一方、小学生になると夏休みということもあり、午前中に読む家庭もある。そのまま読み聞かせが就寝前の習慣として位置づいている組もある (図2)。

読み聞かせた人・選んだ人: 読み聞かせは母親、絵本選択は子どもが中心である (図4, 図5)。5歳児では『くいぼうのあおむしくん』、6歳児では『およぐ』が人気で、「絵本と子育ての会」で読み聞かせ、家庭に配付した絵本がよく読まれている。

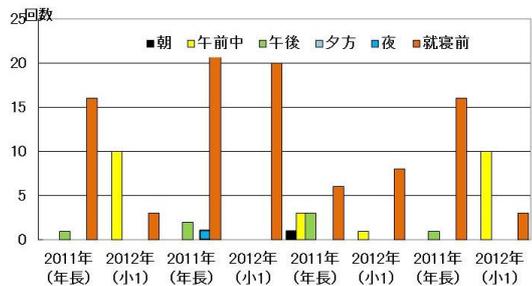


図2 読み聞かせの時間帯 (複数回答可)

子どもの様子: 読み聞かせの間は「黙って聞いている」「絵をじっと見ている」がほとんどである。2組の男児の家庭では、小学生になって「絵本から連想した話をする」ができてきている (図6)。

子どもの反応・母親の感想: 絵本は1冊を繰り返し、じっくり読んでいる組が多いが、色々な絵本を読んでいる組もある。『およぐ』の絵本では、「泳げない子に泳ぐ意欲をもつ

てほしいと願い読み続けている」「子は布団の上で泳ぐまねをするなど生活の中に絵本からの遊びが入っている」などの記述もあった。

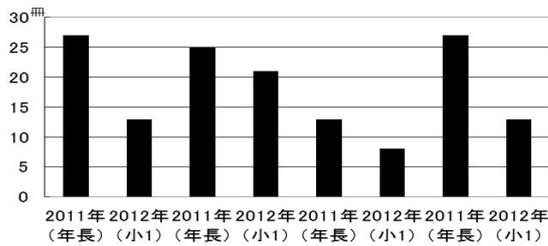


図3 読んだ絵本の合計冊数

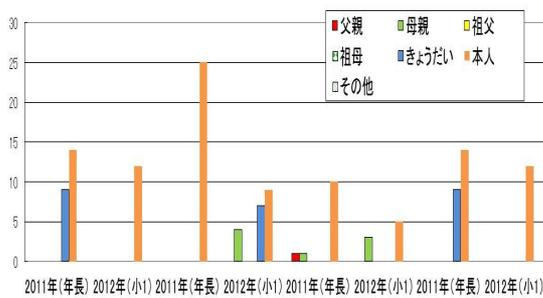


図4 絵本を選んだ人(複数回答可)

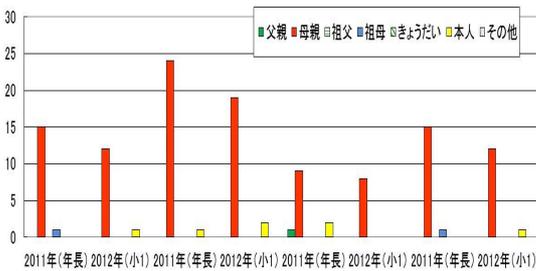


図5 読んだ人(複数回答可)

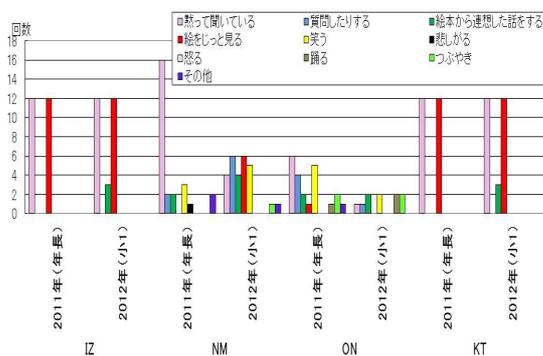


図6 子どもの様子(複数回答可)

(4) 就学期の幼児をもつ養育者の絵本に関する意識調査

【方法】

調査対象者：関東・関西の幼稚園に通う5歳児をもつ養育者637名(男児327名,女児310名;父親9名,母親627名,祖母1名)。養育者の年齢は、30歳代が399名(62.6%)

40歳代が195名(30.6%)と全体の9割以上を占めていた。調査用紙は幼稚園を通して配付・回収した。調査時期は2012年1月~3月であった。

調査項目：読み聞かせに対する養育者の考え、家庭での読み聞かせの量、絵本入手の際に重視すること、子どもの絵本の好み、文字への取組。

【結果と考察】

絵本の読み聞かせの意義：子どもにとって絵本の読み聞かせは、とても大切294名(46.2%)、大切290名(45.5%)と考えている養育者が全体の9割を占めている。養育者が考える絵本の読み聞かせの意義は、情緒の安定を重視する「情緒」、本を好きになることを願う「本好き」、言葉の発達や理解を重視する「言葉」、感性や知性が育つと考える「感性・知性」の4つである。これらのうち、養育者が最重要視しているものをその養育者の考えとして、その後の分析を行った。なお、「情緒」104名、「本好き」113名、「言葉」80名、「感性・知性」322名であり、ほぼ半数の養育者が、絵本を読み聞かせることによって子どもの感性や知性が育つことを望んでいるといえる。

家庭での読み聞かせの量：読み聞かせの頻度は、毎日108名(17%)、週に4.5回92名(14.4%)、週に2,3回135名(21.2%)、週に1回程度120名(18.8%)、ごくたまに164名(25.7%)、まったくしない18名(2.8%)であった。養育者の考えによって異なるかを分析した結果、差は認められなかった($F(3, 615)=1.30, n.s.$)。絵本と子育ての会参加者11名の読み聞かせの頻度は、毎日3名(27.3%)、週に4,5回2名(18.2%)、週に2,3回6名(54.5%)であり、よく読み聞かせを行っている。読み聞かせの頻度と1日の平均の読み聞かせ時間を合計し、家庭での読み聞かせ量とした。家庭での読み聞かせ量と出生順位との関係を検討した結果、第一子が第二子以降より読み聞かせ量が有意に多いことが示された($F(3, 628)=7.42, p<.001$)。子どもに対する読み聞かせ量が多い養育者の方が本好き($t=7.88, df=635, p<.001$)で、本をよく読んでいる($t=6.83, df=635, p<.001$)。読み聞かせ量と父親が子どもと一緒に絵本を見ることについて検討した結果、読み聞かせ量が多い家庭では、すでに父親が読み聞かせをしていた。読み聞かせ量が少ない家庭では、父親には読み聞かせ以外のことで遊んでほしい、期待していないという家庭もあった。絵本と子育ての会に参加している父親は、すべての家庭で父親が読み聞かせをしていた。これは乳児期から月1回の絵本と子育ての会に参加したことによる影響であると考えられる。

絵本選択で重視していること：絵本を入手する際に重視していること(複数回答)が、養育者の考えによって異なるか否かを検討した結果、「親が好きだった絵本」「作者」に有意傾向が認められた(表5)。残差分析の

結果、「親が好きだった絵本」「作者」ともに、「言葉」を重視する養育者が有意に少なく、「作者」については「本好き」を重視する養育者が有意に多い傾向が認められた。

子どもの絵本の好み：子どもの絵本の好みははっきりしているか否かについては、養育者の考えによって異なっていた ($\chi^2(3)=14.10, p<.01$) (表6)。残差分析の結果、好みははっきりしている子どもは、「情緒」に多く、「感性・知性」に少なかった(いずれも $p<.05$)。

子どもと文字：子どもの文字への興味は、養育者の考えによって有意傾向があり ($\chi^2(3)=7.46, p<.01$)、興味をもっている子どもは「情緒」に少なく ($p<.05$)、「本好き」に多かった ($p<.10$) (表6)。また、子どもに文字を教えているかについては、養育者の考えによる差は認められなかった ($\chi^2(3)=3.26, n.s.$)。子どもがどれくらい文字を読めるか(4段階評定)については、ひらがな、カタカナ、漢字、数字ともに、養育者の考えによる差は認められなかった ($\chi^2(9)=5.10, n.s.$; $\chi^2(9)=7.77, n.s.$; $\chi^2(9)=10.52, n.s.$; $\chi^2(9)=7.93, n.s.$) (表6)。

養育者の考えと家庭での読み聞かせ

以上の結果から、養育者の絵本の読み聞かせに対する考えの違いは、実際の読み聞かせ行動や文字への取り組みにあまり大きな影響を与えることはないと言える。これは、子どもが就学直前であることも関係していると考えられる。

表5 絵本を入手するとき重視していること(複数回答)(%)

養育者の考え	親が好きだった絵本	お話の内容	絵や雰囲気が好きのもの	月齢・年齢に合ったもの	子どもが喜びそうなもの	価格
情緒	26.9	58.7	60.6	32.7	70.2	10.6
本好き	27.7	56.3	61.6	33.9	76.8	15.2
言葉	14.1 **	55.1	50.0	29.5	66.7	15.4
感性・知性	28.8	65.2	52.4	34.2	70.0	13.7
χ^2 値	$\chi^2(3)=7.079^*$	$\chi^2(3)=4.729$	$\chi^2(3)=4.923$	$\chi^2(3)=6.58$	$\chi^2(3)=2.711$	$\chi^2(3)=1.254$

(%)

養育者の考え	口コミや評判の高いもの	知能の発達に役立つもの	作者	キャラクターや登場人物	親が気に入ったもの	その他
情緒	23.1	11.5	11.5	9.6	25.0	8.7
本好き	18.8	12.5	15.2 +	12.5	22.3	8.0
言葉	14.1	11.5	3.8 *	10.3	15.4	6.4
感性・知性	17.9	14.7	10.5	12.1	16.3	7.0
χ^2 値	$\chi^2(3)=2.531$	$\chi^2(3)=1.077$	$\chi^2(3)=6.266^*$	$\chi^2(3)=7.15$	$\chi^2(3)=5.416$	$\chi^2(3)=4.78$

+ $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$

表6 子どもの絵本の好み、文字への取り組み (%)

養育者の考え	絵本の好み が明確	文字への 興味あり	文字を 教えている	少しでも読める文字			
				①ひらがな	②カタカナ	③漢字	④数字
情緒	50.5	92.1	77.5	100.0	95.1	68.0	100.0
本好き	43.1	99.1	79.5	97.3	91.0	78.4	97.2
言葉	44.7	93.7	77.2	98.7	91.0	65.4	98.7
感性・知性	31.9	96.2	83.7	97.5	94.0	66.4	99.4

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

藪中征代・吉田佐治子 絵本をめぐる親子の言語的相互作用 絵本読み場面における子どもの語りを通して、聖徳大学研究紀要、査読有、24号、2014、1-9

藪中征代 昔話絵本の絵が幼児の理解および作話に及ぼす影響、聖徳大学研究紀要、査読有、23号、2013、1-8

[学会発表](計8件)

藪中征代・吉田佐治子・村田光子、絵本をめぐる親子のやりとり(11) 就学期の幼児をもつ養育者の絵本に対する考えと家庭での絵本の読み聞かせ、日本保育学会第67回大会、2014年5月18日、大阪総合保育大学

藪中征代・吉田佐治子・村田光子、絵本を介した親子のやりとり(9) 子どもの好きな絵本・親の好きな絵本、日本教育心理学会第55回総会、2013年8月19日、法政大学

藪中征代・吉田佐治子・村田光子、絵本をめぐる親子のやりとり(7) 4組の親子の絵本ダイアリーの分析を通して、日本保育学会第66回大会、2013年5月11日、中村学園大学

藪中征代・吉田佐治子・村田光子、絵本を介した親子のやりとり(8) 就学期の幼児をもつ養育者の絵本に関する意識調査を通して、日本発達心理学会第24回大会、2013年3月15日、明治学院大学

藪中征代・吉田佐治子・寺田美子、絵本をめぐる親子のやりとり『あいうえおの本』の絵本の読み聞かせを通して、日本教育心理学会第54回総会、2012年11月23日、琉球大学

藪中征代・吉田佐治子・村田光子、1冊の絵本をめぐる親子のやりとり 文字のない絵本『ぞうのボタン』の読み聞かせを通して、日本保育学会第65回大会、2012年5月4日、東京家政大学

藪中征代、絵本をめぐる親子のやりとり(6) 『かいじゅうたちのいるところ』の絵本の読み聞かせを通して、日本発達心理学会第23回大会、2012年3月10日、名古屋大学

藪中征代、絵本ダイアリーからみた家庭における親子のコミュニケーション、日本保育学会第64回大会、2011年5月22日、玉川大学

[図書](計2件)

藪中征代・吉田佐治子他、教育出版、100冊の絵本と親子の3000日、2014、1-145
藪中征代他(編著)、教育出版、保育の心理学、2012、1-221

6. 研究組織

(1)研究代表者

藪中 征代 (YABUNAKA, Masayo)
聖徳大学・教職研究科・准教授
研究者番号：50369401

(2)研究分担者

吉田 佐治子 (YOSHIDA, Sachiko)
摂南大学・法学部教職課程・准教授
研究者番号：20331382